

『十三世紀フランス語聖書』 (*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：＜パリ-アッコンの画家＞帰属作品について

駒 田 亜紀子

はじめに¹

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である²。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である³。本論では、『十三世紀フランス語聖書』の普及期（1270-80年代）の作例より、いわゆる＜パリ-アッコンの画家（＝聖ヨハネ騎士団の画家）＞に帰属する挿絵を含む作例（New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 494）（図4-12）を取り上げ、パレスティナにおける十字軍国家最後の拠点となったアッコンで活躍したこの画家の『十三世紀フランス語聖書』普及期における活動の一端を明らかにし、フランス語聖書と因縁浅からぬこの画家をめぐる諸問題を解明する端緒としたい。

1 パリ-アッコンの画家（＝聖ヨハネ騎士団の画家）研究史

＜パリ-アッコンの画家＞は、パリおよびパレスティナにおける十字軍国家の最後の拠点となったアッコンで活躍したことに因み、J.フォルダにより命名された、逸名の画家である。J.フォルダは、エルサレム王国終末期（1275-1291年）のアッコンにおける写本彩飾について論じた1976年のモノグラフィにおいて、この時期とりわけ1280年代より現存作品が急増するフランス語世俗写本の挿絵制作において活躍したある彩飾画家の様式的個性を識別し、基準作の注文主に因み「聖ヨハネ騎士団（エルサレムの聖ヨハネ病院修道会）⁴の画家 Hospitaller Master」と命名した⁵。フォルダは、また、この画家のアッコンおよびパレスティナ渡航以前のパリにおける活動実態の解明を試み、エルサレム王国滅亡後のパリ写本彩飾への影響についても論じている。フォルダは、さらにその後の研究において、1976年以降に同定したこの画家の帰属作品に関する考察も進め、第三次十字軍遠征（1187年）からアッコン陥落（1291年）までの「十字軍美術」を総括する浩瀚なモノグラフィ（2005年）においては、この逸名画家の名を「聖ヨハネ騎士団の画家 Hospitaller Master」から「パリ-アッコンの画家 Paris-Acre Master」へと改めた⁶。2008年に刊行された概説

書でもこの新名称に拠っている⁷。

フォルダが1976年の著作においてパリ-アッコンの画家の基準作として取り上げた作品は、13世紀当時キケロに帰されていた『修辞学 *Rhetorica ad Herennium*』のフランス語訳写本 (Chantilly, Musée Condé, ms. 433 (590)) (図1、2) である。この写本テキストは、シャンティイ所蔵写本の序文末尾の覚書 (fol.12v) によれば、1282年アッコンにて、アンティオキアのジャンなる人物により、聖ヨハネ病院修道会士グリエルモ・デイ・サン・ステファノのために、仏語訳されたという⁸。グリエルモについては、当時のアッコンにおいて法律家としても重要な位置を占めていたこと、1287年にアッコンを去り彼の所属するロンバルディアの小修道院に戻ったこと、アッコン陥落後の1296年に同修道会のキプロス管区長として再び東地中海域に赴き、おそらく1303年に同地で没したこと等が知られている⁹。フォルダは、シャンティイ所蔵写本に認められる、十字軍国家制作の写本に特有の古文書学・書冊学的特徴や、訳出された新しい写本テキストの筆写に際して交わされたであろう翻訳者・写字生・画家間のやり取りや試行錯誤を窺わせる細部などから、同写本がグリエルモ本人に献じられたオリジナルであることを慎重に論証した¹⁰。この論証が正しければ、シャンティイの『修辞学』は、今日知られている限り唯一の制作地および制作年が明記された十字軍国家由来の彩飾写本であり、同時に注文主の社会・文化的背景や伝記的情報についてもある程度まで確認しうる、エルサレム王国終末期に制作されたフランス語写本の真に貴重な作例と言えよう。

シャンティイのキケロ写本に見られるパリ-アッコンの画家の挿絵装飾は、フォルダ自身が「最も予期しない様相」と述べるように、かつてH.ブフタルが、近年ではD.ヴァイスが、13世紀中葉にアッコンで制作された『ルイ9世のフランス語聖書 (アルスナルの聖書)』 (Paris, Bibliothèque de l' Arsenal, ms. 5211) について論じた¹¹フランコ-ビザンティン「十字軍」様式とは全く異質の、「パリのゴシック様式」で貫かれている¹²。黒の描き起し線や縁取りの白線により輪郭を強調した平面的な賦彩、緩やかで大振りな弧を描く衣襷、手足の動きをリズムカルに呼応させた細身に重量感に乏しい人物、褐色の細線で描き起された頭髪や目鼻、尖頭アーチなど西欧のゴシック建築特有の細部を備えた建築物の描写などは、画家ごとの個性による差異はあるにせよ、13世紀後半のパリ写本挿絵全般に共通する特徴である。さらに、我々の画家の人物表現に特有の細部としては、額の生え際から顎まで直線的なシルエットを描く頭部、緩やかな弧を描く長めの眉とそれに続くS字形のラインにより描かれた鼻、丸みを帯びた杏仁形あるいは団栗形の目をした童顔気味の顔立ち、男性頭部において額生え際中央部から後頭部に向かい平行線を描くオールバック様の部分や、生え際から顔の輪郭に沿って側頭部に向かう頭髪が耳を囲むように描く大きな同心円状のウェーブに見られる特徴的な髪形、等を指摘することができよう¹³。松葉状のV字を描くマントの襷や、ループ状の襷を畳みながらも逆V字形のエッジとともに直線的で単純なシルエットに還元された衣の裾は、しばしば人物像に扁平な印象を与えている (図1-3、6-8、12)。

こうして識別された様式的特徴を拠所に、フォルダは、1276年の年記を持つパリのサント・ジュヌヴィエーヴ修道院の『サンス地代台帳 *Censier*』(Paris, Archives Nationales, ms. Pièce S 1626(1)) をアッコン渡航以前のパリにおけるパリ-アッコンの画家の作品とし¹⁴、1282年の年記を持つキケロ写本(図1、2)や『アルスナルの聖書』と同じ写本テキストに拠る『フランス語聖書』(Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404)¹⁵(図3)に加え、十字軍国家で人気を博した『エルサレム王国年代記 *Histoire d'outremer*』など、1280-1291年頃までにアッコンで制作された写本計6点¹⁶に、同画家の筆を認めた。さらに、パリ-アッコンの画家のそれに様式的に関連の深い作品として、『エルサレム王国年代記』と並びアッコンで人気を博したフランス語写本テキスト『世界年代記 *Histoire universelle*』の1写本(Paris, BnF., ms. fr. 20125)¹⁷や『聖王ルイ伝』の著者として名高いジャン・ド・ジョワンヴィルが1250-51年頃アッコンで著した『信仰信条 *Credo*』の挿絵断片(Paris, BnF., ms. lat. 11907, fols. 231-232v)¹⁸等を、1280年代のアッコンに帰している。他方、アッコン陥落(1291年5月)後のパリ-アッコンの画家の手になる作品は確認できないとしながらも、1276-1300年頃にかけてパリで制作されたフランス語写本に同画家の系譜に連なる写本彩飾画家の活動を認め、詳細に論じている¹⁹。

J.フォルダによる1976年のモノグラフィ刊行後、パリ-アッコンの画家に関して新たな知見がもたらされるようになったのは、1990年代に入ってからのことである。フォルダは、1994年ならびに1996年発表の雑誌論文において、エルサレム王国最末期の1290年頃に同地で制作されたと推測される『エルサレム王国慣例法令集 *Livre des Assises*』写本(Venezia, Biblioteca Marciana, ms. fr. app. 20)を取り上げ、アッコン所縁のフランス語世俗写本作品におけるパリ-アッコンの画家の寄与を明らかにした²⁰。フォルダはさらに1997年発表の論文で、『聖マルティヌス伝』写本(Paris, BnF., ms. lat. 5334)の物語イニシアルを1276-1280年頃のパリにおける同画家の作品に加え、依然として詳らかではないパリ-アッコンの画家のパリ時代の活動に光を当てている²¹。

他方、フォルダの1990年代の一連の論文と平行して発表されたA.ストーンズの論考は、13世紀最終四半期における北フランス写本彩飾を主として様式的な観点から広範に論じる中で、パリ-アッコンの画家あるいは同画家の様式的系譜に属する画家たちの作品に言及し、彼女が提案する同時代の緩やかな様式的グループあるいはネットワーク²²の中にこれらの画家たちを位置付けている。1993年に発表したクレティアン・ド・トロワ写本の《Artistic Context》に関する論考では、フォルダが1976年のモノグラフィ中の註においてパリ-アッコンの画家のアッコン初期作品の一つ『フランス語聖書』の創世記扉絵のレイアウトの比較例としてのみ言及した²³ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館所蔵の『十三世紀フランス語聖書』写本(New York, Pierpont Morgan Library, ms. M.494)(図6-9、11、12)を、フォルダがパリ-アッコンの画家の様式を継いだ画家による1300年頃のパリの作とするコペンハーゲン王立図書館所蔵の『十三世紀フランス語聖書』(Copenhagen, Kongelige Bibliotek, ms. Thott.7 fol.)写本²⁴とともに、パリ-アッコンの画

家グループの後期作品に位置付けている²⁵。A.ストーンズは、さらに、1998年ボーヴェで開催された国際研究集会での口頭発表に基づき2001年に刊行された報告書掲載の論考²⁶において、ニューヨークの『十三世紀フランス語聖書』の挿絵制作に携わった3人の画家のうち、主要画家(図4、5、10)ならびにパリ-アッコンの画家(図6-8、11、12)が、ボーヴェに関わりのある2点の詩篇集(New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 98および ms. M. 101)の挿絵制作にそれぞれ関与していることを指摘した²⁷。1997年の論文発表後まもなくニューヨークの『十三世紀フランス語聖書』におけるパリ-アッコンの画家の関与に気付いたフォルダも、2005年のモノグラフィにおいて、この写本を同画家のパリにおける数少ない初期作品に加え、『サンス地代台帳』と『聖マルティヌス小伝』より後の1280年頃の作としている²⁸。

2 ニューヨーク、ピアポイント・モーガン図書館、M. 494番写本 (New York, Pierpont Morgan Library, ms. M. 494; 以下、M.494と略す)²⁹ (図4-12)

639フォリオ、385 x 280mm

収録テキスト：創世記-黙示録

制作地：パリ

制作年代：1276-1280年頃

M.494は、現存する『十三世紀フランス語聖書』写本最古の完本の一つである。『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した中世フランス語聖書研究の第3部において、13世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テキストを指して命名した写本テキストである³⁰。しかし、1884年当時このテキストを完本の状態で収録した写本の存在は知られておらず、ベルジェが同テキストを定義するにあたり基準作の一つとしたパリのフランス国立図書館フランス語899番写本(パリ、1270-75年頃)³¹も旧約聖書後半部や新約聖書の書簡の大半を欠く状態で伝存していたため、初の完訳フランス語聖書としての『十三世紀フランス語聖書』の存在自体を疑問視する研究者もいた³²。『十三世紀フランス語聖書』の写本テキストとしての“実体”が認められるようになったのは、20世紀に至り、M.494を始めとする13世紀末~14世紀初頭の完本の存在³³が知られるようになってからのことである。

M.494は、『十三世紀フランス語聖書』の初期の貴重な完本の作例として、中世フランス語聖書研究者の間では1960年代より言及されるようになるが³⁴、その挿絵装飾が美術史研究において議論されるようになったのは、上述のように、1990年代以降のことである。13世紀後半のパリ写本彩飾の体系的な研究に道を拓いたロバート・ブランナーの1977年刊の労作においても、M.494はもとより³⁵、パリ-アッコンの画家帰属作品やフォルダが同画家

の様式的系譜に関連付ける作品も、全く取り上げられていない³⁶。

M.494の現存する計76点の挿絵は、テキスト欄1コラム分の幅を占めるパネル状のミニアテュールないしは1コラムの半分程度の幅の物語イニシアルにより構成される。原則として聖書各書の冒頭に1点ずつ配されるこれらの挿絵には、A.ストーンズおよびJ.フォルダが指摘するように、3人の挿絵画家の手が識別される³⁷。

第1の画家(図4、5、10)は、1270年代末頃フランス王フィリップ3世(1285年没)のためにパリで制作された『フランス大年代記 *Grandes Chroniques de France*』(Paris, Bibliothèque Sainte-Geneviève, ms. 782)の主要画家であり³⁸、逆三角形の頭部にややしゃくれた顎の顔立ち、流麗でしなやかな衣襲に包まれたなで肩で細身の人物像を特徴とする。この第1の画家は、創世記(図4)や聖書後半部の劈頭を飾るソロモンの箴言、新約聖書(冒頭のマタイ伝第1葉は消失)の使徒行伝など、写本全体を通じて重要度の高いテキストの扉絵計35点を担当しており、またその挿絵は創世記冒頭の物語イニシアル以外はいずれもパネル状のミニアテュールである(図5、10)³⁹。この画家の描く挿絵の背地は、表された場面に関係なく、しばしば、ブルーないしはピンク地に白細線で格子文を配した装飾地と金地とにより垂直あるいは水平方向に二分・三分される(図5)⁴⁰。創世記冒頭および写本後半部では、挿絵の直後に置かれた大型彩飾イニシアル(*initiale fleuronnée*)や挿絵の枠から、蔦の葉や大振りな鋸歯状モチーフを伴う蔓あるいは茎状のバゲット装飾がコラムに沿ってページ上下の余白へと伸び、創世記冒頭ではこれに小動物や小鳥が戯れる(図4)。扉絵の真下に置かれる大型彩飾イニシアルの左辺は、文字の形状によっては挿絵パネルの左縁に沿って上方に延伸し、挿絵パネルの端からバゲット装飾へと転じる(図10)。また、創世記冒頭の左コラムの挿絵では枠の四隅に金色の四弁形モチーフを置くが、これは第1の画家が他の写本作品でもしばしば用いる装飾モチーフである⁴¹。Fr.アヴリル、A.ストーンズも指摘するように、この画家は他の画家との共同作業により1270年代後半～1280年代にかけて相当数に上る写本挿絵の制作に携わっており、この時期のパリ写本彩飾の主流をなす画家の一人と位置付けられよう⁴²。

M.494の第2の画家すなわちパリ-アッコンの画家は、列王記1のパネル状ミニアテュールと列王記2～4の物語イニシアル、詩篇冒頭のパネル状ミニアテュールおよび8分節の物語イニシアル、ロマ書序文および本文の扉絵を除くパウロ・使徒書簡のパネル状ミニアテュールおよび物語イニシアル計31点を担当している⁴³。列王記1、詩篇、ペテロ前書、ヨハネ第1書の計4点の扉絵以外はすべて小型の物語イニシアルであるためか、物語イニシアル全点および列王記1のパネル状挿絵の背地には、無地ないしは格子文様を型押しした金地が用いられている(図6-8)。挿絵主題に関して言えば、M.494の列王記⁴⁴や詩篇⁴⁵の扉絵(図6-8)は、いずれも、これらの分節の挿絵として13世紀中葉以降パリで定型化した図像⁴⁶を扱っており、パウロおよび使徒書簡の扉絵の大半も、これまた類型化した容姿に巻物やアトリビュートを携えた着座ないしは直立する著者像を描く(図11、12)。しかしながら、パリ-アッコンの画家のレパートリーとしてこれらの挿絵を見る

と、フォルダが指摘する M.494の詩篇第26篇の物語イニシアル「ダヴィデの戴冠」(図7)とパリの『フランス語聖書』(Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404)列王記2の段落形式の挿絵「ダヴィデの塗油」⁴⁷の他にも、両写本の列王記2冒頭の「アマレク人の処刑」(図3、6)や列王記3冒頭の「ダヴィデとアビシャグ」において登場人物の配置やポーズが酷似しており、共通のモデルに依拠していることが判る⁴⁸。

M.494は、パリ-アッコンの画家の二次的装飾のレパートリーに関しても、興味深い資料を提供する。パネル状ミニアテュールや物語イニシアルが置かれたページでは、先端に蔓や鋸歯状モチーフを伴うバケット装飾が、コラム左隣の余白に沿って伸びる(図8、11、12)。これらのバケット装飾が第1の画家のそれと異なるのは、これが挿絵パネルやイニシアルの枠から直接伸びる(図4、10)のではなく、時に余白に浮遊し(図11)、ドラゴン等のグロテスク・モチーフをいわばシナプスのように介して挿絵パネルやイニシアルの枠に接続しているということである(cf. 図6、8)。特に興味深いのは、フォルオ318(詩篇第97篇)の物語イニシアルに噛みつく正面観のドラゴン(図8)や、フォルオ630(ヨハネ第1書)の挿絵パネル左隣の余白に両脚の付け根と腹を見せてぶら下がるドラゴン(図12)の表現である。蔓草モチーフと絡みつつ多様な姿態を見せる側面観のドラゴンは中世後期を通じてパリ写本彩飾にはお馴染みのモチーフであるが、正面観のドラゴン頭部は時おり彩飾イニシアル内部に描かれる以外には、筆者の知る限り同時代のパリには類例を見ない。ところが、こうした噛みつく正面観のドラゴンや腹あるいは背を見せてぶら下がるドラゴンの表現は、1260-80年代にかけてカンブレ、アラス、リール等の北フランスないしはフランドルの諸都市で制作された一連の彩飾写本に類出するモチーフなのである(図13、14)⁴⁹。こうした類例を以てパリ-アッコンの画家を直ちにこの地域に結び付けることは尚早であろうが、未だ有力な手掛りに乏しいこの画家の様式的出自をめぐり探究にとって、示唆に富む細部である。

バケット装飾に加え、その周囲に浮遊する小動物やドロルリー・モチーフもまた、M.494における我々の画家の重要な二次的装飾のレパートリーである。第1の画家が挿絵を担当したページでは創世記扉絵の余白にのみ見られた小動物は(図4)、パリ-アッコンの画家が挿絵を担当したページではしばしばコラム上下の余白にバケットや蔓から遊離した状態で現れる(図6、7)。コラム上下の余白に浮遊する小動物やドロルリー・モチーフは、1282年の年記を持つシャンティイの『修辞学』(図2)にも現れる、我々の画家を特徴づける装飾要素と言えよう。

M.494の第3の画家は、歴代誌上下からヨブ記までの旧約歴史諸書ならびにエレミヤ哀歌、バルク書、エゼキエル書冒頭(図9)のパネル状ミニアテュール計10点を手がけている⁵⁰。この画家の描く人物は、顔貌や耳の上で大きな同心円状のウェーブを描く髪形あるいは衣襷などの点において、パリ-アッコンの画家と比較しうる。その一方で、比較的大きな頭部が頑強な体躯に載るややずんぐりした人物のプロポーションは、我々の画家の描く人物とは異なる。また、この画家の挿絵を含むページには、バケット装飾やドロル

リー・モチーフは全く見られない。

M.494の第2および第3の画家は、人物の顔貌や衣襲表現において様式的に近い関係にあり、同じ工房に属する師弟等の関係にあった可能性も考えられる。こうした観点から、第2の画家すなわちパリ-アッコンの画家および第3の画家の担当した挿絵を含むページに見られる今一つ興味深い細部は、IおよびJの彩飾ないしは物語イニシアルの扱いである。聖書写本に見られるIおよびJの物語/彩飾イニシアルは、細長い矩形枠の内部にメダイヨン（創世記冒頭のI (n principio) イニシアル)⁵¹や著者立像（預言書や使徒書簡）⁵²を描き込むのが一般的であり、彩飾イニシアルの場合は細長い矩形枠を文字本体に見立てその内部を蔓草文やグロテスクで充填する⁵³場合が多い。シャンティイ『修辞学』のフォリオ45vの彩飾イニシアルJ (adis quant les Crotoniciens ...) (図1)もこのタイプに属する。ところがM.494では、列王記2 (Il avint apres ...) (図6) および詩篇第38篇冒頭の物語イニシアル (Je dis je gardere ...)、エゼキエル書 (Il avint ou ...) およびヤコブ書簡 (Jaques serianz ...) の彩飾イニシアル (図9、11)において、一般的なイニシアルとは全く異なる装飾方法が採られている。すなわち、物語イニシアルの場合、正方形に近いプロポーシヨンの矩形枠内部の右端に帯状の区画を更に設け、左側の区画に物語場面を、右端の帯状区画にグロテスクを伴う蔓草モチーフを配するのであるが、列王記2では矩形枠がテキスト欄内に収まらずコラム左隣の余白に半分以上はみ出している (図6)。パネル状ミニアテュールの例ではあるが、シャンティイの『修辞学』にも同様の余白へのはみ出しが認められる (図1)。付言すれば、M.494の列王記2や詩篇第38篇の物語イニシアル内部の帯状区画を充填するドラゴン+蔓草モチーフは、シャンティイ写本の上述の彩飾イニシアルJに再び見出されることになる (図1、6)。一方、後者の彩飾イニシアルの場合 (図9、11)、矩形枠を文字本体に見立てるといよりは、矩形枠内部に描かれた細い蔓草モチーフと鳥、魚、ドラゴン等を組み合わせて文字本体を形成するという、形象イニシアルにも似たユニークな手法が認められる。しかして結果は、イニシアルというよりは、蔓草や鳥獣グロテスク・モチーフを自由に配したパネル装飾のような外観である。かような彩飾イニシアルの類例を現時点で筆者は他に知らないが、上述のバゲット装飾に伴うドラゴンのモチーフ同様、パリ-アッコンの画家の様式的出自あるいは系譜にかかる探究において、今後何らかの手掛りを供する可能性もあるのではなかろうか。

3 結語にかえて

J.フォルダによるパリ-アッコンの画家の「発見」は、彼自身が総括するように、パレスティナの十字軍国家において展開した写本彩飾の研究に、新たな地平を開いた。この画家は、一方で、彼の地において現地のビザンティン様式と西欧起源の様式との混淆により独特の折衷様式を生み出した1270年代までの画家たちとは異なり、同時代のパリのゴシッ

ク様式により形成・完成された画家であり、パレスティナにおける10年余の活動期間を通じ、その様式の基調が変わることはなかった。パリ-アッコンの画家は「パリとアッコンの間の artistic bridge 懸橋」となったが、それは13世紀中葉に『アルスナルのフランス語聖書』がそのテキストと彩飾すなわち「作品」によって聖地と盛期ゴシックのフランス本土とを結びつけたのとは異なり、「画家」その人の経歴によってであった⁵⁴。ニューヨークの『十三世紀フランス語聖書』M.494は、この画家のフランス本土における経歴を探究する上で、不可欠の資料である。

14世紀に入るや瞬く間にフランス語聖書の市場を制覇することになる『歴史物語聖書 *Bible historique*』を北フランス・アルトワの聖職者ギヤール・デ・ムーランが「さる御方の依頼により」編纂したのは、奇しくもアッコン陥落の年、1291年のことであった。一見すると単なる偶然のように見えるこの符合は、しかしながら偶然ではあるまい。アッコン陥落がもはや不可避となったまさにこのときに、フランス語聖書の新たな需要がフランス本土において、しかも十字軍遠征にことのほか深く関与してきた北フランスの君公たちの間で、高まったのである。聖書の物語を世俗史も組み込んだ史伝的枠組みの中でいわば再構築した『歴史物語聖書』により市場を奪われることになった『十三世紀フランス語聖書』が、その限られた流通期間にもかかわらず、『歴史物語聖書』⁵⁵とは比較にならぬほど広範な諸地域に伝播した最大の理由も、十字軍遠征に何らかの形で関与した君公たちの交流によるところが大きいと思われる。その意味で、十字軍国家の写本彩飾において独特の位置を占めたパリ-アッコンの画家が、彼我において2種類の異なるフランス語聖書、すなわちニューヨークの『十三世紀フランス語聖書』(M.494)とパリの『フランス語聖書』(Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404)の制作に携わったのは、この時期のフランス語聖書の需要あるいは市場のありようを探る我々の試みにとって、真に興味深いことと言わねばならない。

フォルダが指摘するように、パリ-アッコンの画家の様式は、13世紀末に至るまで、パリあるいは北フランスの写本彩飾に様々な「余波」を送り続けることになるが、その中にはさらに数点の『十三世紀フランス語聖書』も含まれている。『十三世紀フランス語聖書』テキスト研究の進展、中でも初期から普及期の作品の写本伝承関係 (*stemma*) の究明により、パリ-アッコンの画家とフランス語聖書との関わりの解明に資する更なる知見がもたらされることを期待したい⁵⁶。

註

1 本論は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した2件の研究報告(「13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究-『十三世紀フランス語聖書』写本挿絵の展開-」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15(2003)年、p. 471-480、および2004年5月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告)においてその概要を示した、

『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の一部をなすものである。紙幅の都合上、『十三世紀フランス語聖書』の彩飾写本全般に関する先行研究ならびに同テキストに関する聖書文献学ないしは中世フランス語文学における先行研究については、稿を改めて問題点を整理することとしたい。

2 『十三世紀フランス語聖書』写本テキストに関する主要な研究としては、拙論「『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美学美術史学』第23号(2009)、pp.(39)-(53)、註2に引用した文献を参照。

3 主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、註1に引用した拙著2003中のリストを参照(修正の必要あり)。

4 聖ヨハネ騎士団(聖ヨハネ病院修道会)については、橋口倫介『十字軍騎士団』講談社学術文庫、1994年、第2章を参照。

5 FOLDA (J.), *Crusader Manuscript Illumination at Saint-Jean-d'Acre 1275 - 1291*. Princeton, 1976, esp., pp. 42-116, 142-158.

6 FOLDA (J.), *Crusader Art in the Holy Land, from the Third Crusade to the Fall of Acre, 1187 - 1291*. Cambridge U.P., 2005, pp. 411-435, esp., p.411-412.

7 FOLDA (J.), *Crusader Art. The Art of the Crusaders in the Holy Land, 1099 - 1291*. Aldershot, 2008, esp., pp. 146-163, esp., p. 149-153.

8 FOLDA 1976, pl. 26, pp. 42-43, esp., note 5; FOLDA 2005, pp. 412-414. アンティオキアのジャンについては、article 《Jean d'Antioche》, in : HASENOHR (G.) & ZINK (M.), éd., *Dictionnaire des Lettres françaises. Moyen Âge*, Paris, 1992, p. 743を参照。

9 グリエルモ・ディ・サン・ステファノについては、FOLDA 1976, pp. 42-43, esp., note 5; FOLDA 2005, pp. 412-414および註の引用文献を参照。

10 FOLDA 1976, pp. 44-46, 175-192; FOLDA 2005, pp. 412-413.

11 いわゆる『アルスナルの聖書』(Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, ms. 5211)については、BUCHTHAL (H.), *Miniature Painting in the Latin Kingdom of Jerusalem* (with liturgical and palaeographical chapters by F. WORMALD). Oxford Univ. Press, 1957; WEISS (D.), The three Solomon portraits in the Arsenal Old Testament and the construction of meaning in Crusader painting, in : *Arte medievale*, 2 ser., VI/2 (1992), pp. 15-38; Ibid., *Art and Crusade in the Age of St. Louis*. Cambridge Univ. Press, 1998を参照。

12 FOLDA 2005, p. 412.

13 FOLDA 1976, p. 53.

14 FOLDA 1976, pp. 52-60, pls. 33-36; cf. Ibid., 2005, pp. 416-419.

15 『フランス語聖書』Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404については、FOLDA 1976, pls. 37-50, pp. 60-75, 97, 98, 108-111, 152-153, 179-180; Ibid., 2005, pp. 414-416を参照。この重要な写本作品については、稿を改めて議論したい。同写本テキストについては、NOBEL (Pierre), *La Bible d'Acre. Genèse et Exode. Edition critique d'après les mss. BNF nouv. acq. fr. 1404 et Arsenal 5211*. Besançon, Presses Universitaires de Franche-Comté, 2006を参照。この写本テキストは起源の異なる旧約聖書部分仏語訳の集成であることが知られているが、フランス国立図書館所蔵の『フランス語聖書』は、士師記の序文(『アルスナルの聖書』には含まれていない)に、士師記仏語訳が12世紀第3四半期にロンドンのテンプ

ル騎士団領に所属していた Maistre Richard および Frere Othon なる人物のためになされたことを伝えている。Cf. FOLDA 1976, pp. 60-67 ; NOBEL 2006, pp. XII-XIII.

16 FOLDA 1976, pp. 42-52, 60-95, 111-116 ; cf. Ibid., 2005, pp. 424-429 : Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404, 『フランス語聖書』(1280年頃) ; Chantilly, Musée Condé, ms. 433 (590), 『修辞学 *Rhetorica ad Herennium*』(1282年) ; Paris, BnF., ms. fr. 9084, ティルス司教ギヨーム著『エルサレム王国年代記 *Histoire d'outremer*』(1286年) ; Boulogne-sur-Mer, Bibliothèque municipale, ms. 142, 『同上』(1287年) ; Bruxelles, KBR, ms. 10212, 『ローマ建国史 *Fatis des Romains*』 ; Firenze, Biblioteca Laurenziana, ms. Plut. LXI. 10, 『エルサレム王国年代記』(1290-91年頃 : 写本後半部にヴェネツィアで14世紀前半に付加された挿絵彩飾を含む)。パリ-アッコンの画家の手になる『エルサレム王国年代記』写本挿絵については、FOLDA (J.), Image of Queen Melisende in manuscripts of William of Tyre's *History of Outremer*, in : *Gesta*, XXXII/2 (1993), pp. 97-112 および MIQUEL (André), *Des enseignements de la vie. Souvenirs d'un gentilhomme syrien du temps des Croisades*, Paris : Collection orientale de l'Imprimerie nationale, 1983 内のカラー図版も参照。

17 FOLDA 1976, pp. 95-103, pls. 51-93 ; Ibid., 2005, p. 429-433 ; Ibid., 2008, pp. 151-152. このパリ所蔵の『世界年代記』写本については、1976年のモノグラフィ発表以来、挿絵制作に携わった画家とパリ-アッコンの画家との様式的関連のあり方や、制作を13世紀第3四半期のパリとする意見など、様々な異論が提出されている (cf. FOLDA 2005, p. 429-433, 特に notes 497-499, 501-503の引用文献) が、フォルダは近年発表された同写本の挿絵サイクルに関する詳細な論考を補強として、改めて同写本のアッコン制作説を主張している (FOLDA 2005, pp. 432-433および notes 500, 508, 511, 512の引用文献)。

18 FOLDA 1976, pp. 103-110. フォルダは『信仰信条』の制作地をアッコン、制作年代を1280-90年頃とし、今日失われた禮拜堂壁画の下絵であった可能性を指摘している。この『信仰信条』挿絵断片については、FRIEDMAN (Lionel J.), *Text and Iconography for Joinville's Credo* (Mediaeval Academy of America Publication, no. 68), Cambridge (Mass.), 1959 ; SCHELLER (Robert W.) / trad. HOYLE (Michael), *Exemplum. Model-Book Drawing and the Practice of Artistic Transmission in the Middle Ages (a. 900 - 1470)*. Amsterdam, 1995, pp. 194-200を参照。

19 FOLDA 1976, pp. 120-129, 142-155. フォルダは挿絵彩飾の様式に加えて『エルサレム王国年代記』等の挿絵図像の詳細な比較分析を通じて、彼の取り上げる写本がパリの制作であることを論じている。なお、ここでフォルダが指摘している一群の写本作品の最後にコペンハーゲン王立図書館所蔵の『十三世紀フランス語聖書』(Copenhagen, Kongelige Bibl., ms. Thott. 7 fol.) が取り上げられているが (FOLDA 1976, pp. 152-154, pls. 284-289)、同写本の挿絵彩飾の様式ならびに図像については、稿を改めて論じたい。

20 EDBURY (Peter) & FOLDA (J.), Two XIIIth-century Manuscripts of Crusader legal texts from St-Jean d'Acre, in : *J. W. C. I.*, LVII (1994), pp. 243-254, pls. 31-33 ; FOLDA (J.), The Hospitaller Master in Paris and Acre : Some Reconsiderations in Light of New Evidence, in : *Journal of the Walters Art Gallery*, 54 (1996), pp. 51-59, 269-272 ; cf. FOLDA 2005, p. 395.

21 FOLDA (J.), Paris, Bibliothèque nationale, ms. lat. 5334 and the Origins of the Hospitaller Master, in : KEDAR (Benjamin Z.), RILEY-SMITH (J.), HIESTAND (Rudolf), éd., *Montjoie. Studies in Crusade History in Honour of Hans Eberhard Mayer*. Aldershot, 1997, pp. 177-187 ; cf. FOLDA 2005, pp. 416-419.

- 22 A.ストーンズは、《Master》の名の許に定義された画家の個別様式を（フォルダが1976年のモノグラフィにおいて行ったように）比較的厳密に区別するよりは、しばしば《(sub-) group》等の概念を用いてより緩やかな様式的連関のもとに位置付ける方法論を採る。彼女の論考にしばしば見られるように、相対的に研究が立ち後れ、同時代・地域における既知の作品との直接的な様式的連関が直ちには見出し難い作品群をとりあえずより大きな《Artistic Context》の中に位置付けるのに適した方法論であろう。
- 23 FOLDA 1976, p. 68, note 113.
- 24 FOLDA 1976, p. 152-155.
- 25 STONES (A.), *The Illustrated Chrétien Manuscripts and their Artistic Context*, in : BUSBY (Keith), et al., *Les manuscrits de Chrétien de Troyes / The manuscripts of Chrétien de Troyes*. 2 vols., Amsterdam, 1993, tome 2, p. 235. ただし、ニューヨークおよびコペンハーゲン所蔵の2点の『十三世紀フランス語聖書』の制作地については、パリが自明ではない（《... an attribution to Paris is certainly not guaranteed for either one.》）とも述べる。
- 26 STONES (A.), *Les manuscrits du cardinal Jean Cholet et l'enluminure beauvaisienne vers la fin du XIIIe siècle*, in : *L'art gothique dans l'Oise et ses environs (XIIe - XIVe siècles). Architecture civile et religieuse, peinture murale, sculpture et arts précieux, etc ... Colloque international organisé à Beauvais les 10 et 11 octobre 1998 par le G.E.M.O.B.*, Beauvais, 2001, pp. 239-266, esp. pp. 249-250, 263-266.
- 27 ストーンズは、ここでは、ニューヨークの『十三世紀フランス語聖書』の制作年代には言及していないが、その主要画家が制作に携わった詩篇集（ms. M. 98）の制作年代を1270年代末～1280年代初頭と示唆している。Cf. STONES 2001, p. 266.
- 28 FOLDA 2005, p. 416-419 ; Ibid., 2008, pp. 148-149.
- 29 M. 494については、註30, 34に引用する基本参考文献に加え、以下の文献を参照：PELLEGRIN (E.), *La Bibliothèque des Visconti et des Sforza, ducs de Milan. Supplément*. Firenze, 1969, p. 56 (M. 494がおそらくフランス王ジャン2世の王女であり後にジャンガレアツォ・ヴィスコンティに嫁いだイザベルの所有であったことを指摘) ; SNEDDON (C.R.), *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., 2 vols., University of Oxford, 1978, vol. 1, p. 146-148 (catalogue) ; Idem., *Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle*, in : *La Bibbia in Italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti del Convegno Internazionale, Firenze, Certosa del Galluzzo, 8-9 nov. 1996*, Firenze, 1998, pp. 229-254, esp., p. 214, 238, 241.
- 30 BERGER (S.), *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, chap. 3.
- 31 Paris, BnF., ms. fr. 899については、拙論2009、pp.(39)-(41)および引用参考文献を参照。
- 32 MEYER (P.), *compte rendu de BERGER 1884*, in : *Romania*, XVII (1888), pp. 121-144.
- 33 シャンティイのコンデ美術館所蔵の2巻本（Chantilly, Musée Condé, ms. 4-5 : Paris, 1300年頃）；すでにベルジェに知られていた前半部（London, British Library, ms. Harley 616）に続く後半部（London, British Library, ms. Yates Thompson 9）が1929年に大英図書館に寄贈されたことにより完本であることが確認された。
- 34 Cf. ROBSON (C. A.), *Vernacular Scriptures in France*, in : LAMPE (G.W.H.), éd., *Cambridge History*

of the Bible. vol. 2., Cambridge, 1969, p. 530 ; SNEDDON 1978, vol. 1, p. 146-148 (catalogue).

35 M. 494の挿絵には、後述するように、ブランナーの著作 (BRANNER (R.), *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*. Berkeley, 1977) において重要な議論の対象となった<サント・シャペル・グループ>に属する画家がおそらく統括者として挿絵制作に関与しているが、M. 494に関する言及は無い。

36 ただし、フォルダによれば、サント・ジュヌヴィエーヴ修道院の1276年の『サンス地代台帳』の挿絵に最初に注目し (1960年代)、フォルダに注意を促したのは、ブランナーであったという。FOLDA 2005, p. 416, 660, note 432.

37 Cf. FOLDA 2005, p. 662, note 441 (ストーンズのフォルダ宛て1997年の書簡を引用), p. 660-661, note 438 (但しフォルダがここで箴言冒頭 fol. 330の扉絵をパリ-アッコンの画家に帰すのは誤り)。

38 BRANNER 1977, p. 237 (この画家をいわゆる『サント・シャペルの第3の典礼用福音書』(Paris, BnF., ms. lat. 17326) を中心とする《Sainte-Chapelle group - Main Line》に分類); cf. HEDEMAN (A.), *Royal Images. Illustration of the "Grandes Chroniques de France". 1274-1422*, Berkeley, 1991, chap. 1 & pp. 257-258.

39 Fol. 1, 59v, 77, 89v, 108v, 126, 151, 169, 330, 343v, 349, 357, 380v, 406, 461, 470, 473v, 475, 478, 478v, 479, 481v, 482v, 483v, 484v, 485v, 489, 490v, 504v, 531, 543, 562v, 577v, 578, 610v.

40 この第1の画家の挿絵に見られるブルーないしはピンクの背地では、これを透かして土坡と思しきモチーフの下絵線描が確認される場合 (図5、fol. 89v) があり、制作途中で構想変更等があった可能性も考えられる。

41 例えば STONES 2001, p. 249, fig. 453 (Paris, Bibliothèque Sainte-Geneviève, ms. 782, fol. 141) を参照。同様の枠装飾モチーフは、1280-85年頃パリで制作された他の2点の『十三世紀フランス語聖書』(London, British Library, ms. Harley 616 ; Paris, Bibliothèque de l' Arsenal, ms. 5056 ; ただしいずれもM494の第1の画家とは異なる画家による挿絵に伴う) にも見られる。

42 この画家の主要作品リストについては、STONES 2001, p. 250, note 64 ; AVRIL (Fr.), in : GABORIT-CHOPIN (D.), sous la direction de., *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285-1328* (catalogue d'exposition, Paris, Musée national du Grand Palais), Paris, 1998, p. 264-265, no. 172 ; ROUSE (R.H. & M.A.), *Manuscripts and their makers. Commercial Book Producers in Medieval Paris 1200 - 1500*. 2 vols., London, 2000, tome 2, ills. 169-174を参照。

43 Fol. 171, 187v, 200v, 215v, 298v, 302, 305, 308, 311, 314v, 318, 322, 584, 589v, 593, 595, 597, 598, 599v, 600v, 601v, 603, 604, 604v, 605, 605v, 606, 625v, 627, 629, 630, 631v.

44 挿絵主題は以下のとおり：列王記1 (fol. 171) 「ハンナの祈り」、列王記2 (fol. 187v) 「アマレク人の処刑」、列王記3 (fol. 200v) 「ダヴィデとアビシャグ」、列王記4 (fol. 215v) 「欄干から転落するアハズヤ王」。

45 挿絵主題は以下のとおり：詩篇1 (fol. 298v) 「ダヴィデとゴリアテ、豎琴を弾くダヴィデ」、詩篇26 (fol. 302) 「ダヴィデの戴冠」、詩篇38 (fol. 305) 「跪き口を指さずダヴィデ」、詩篇52 (fol. 308) 「愚者」、詩篇68 (fol. 311) 「水中から神に助けを請うダヴィデ」、詩篇80 (fol. 314v) 「カリヨンを奏でるダヴィデ」、詩篇97 (fol. 318) 「歌う修道僧」、詩篇109 (fol. 322) 「玉座に座すキリストと父なる神」。

46 FOLDA 2005, p. 418. 13世紀以降次第に定型化する詩篇の8分節の挿絵主題については、

HASELOFF (G.), *Die Psalterillustration im 13 Jahrhundert*, Keil, 1938を参照。

47 FOLDA 2005, p. 417 ; cf. FOLDA 1976, pl. 45 (Paris, BnF., ms. n. a. fr. 1404, fol. 124v).

48 パリ写本の列王記 2・3 の扉絵については、FOLDA 1976, pls. 44, 46を参照。これらの他にも、パリ写本のトビト記扉絵「寝台に横たわるトビト」のトビトのポーズ (cf. FOLDA 1976, pl. 49) は、M. 494の「ダヴィデとアビシヤグ」の横たわるダヴィデのその反転画像である。

49 1266年に写字生 Johannes Phylomena により筆写されたカンブレ使用式の『朗読用書簡集』(Cambrai, Bibliothèque municipale, ms. 189) を始めとするこれらの彩飾写本については、以下の文献を参照。BEER (E.), *Das Scriptorium des Johannes Philomena und seine Illuminatoren. Zur Buchmalerei in der Region Arras-Cambrai, 1250 bis 1274*, in : *Scriptorium*, 23 (1969), pp. 24-38, pls. 4-13 ; Eadem., *Liller Bibelcodices, Tournai und die Scriptorien der Stadt Arras*, in : *Aachener Kunstblätter*, 43 (1972), pp. 190-226 ; CLARK (Willene B.), *A reunited Bible and 13th-century illumination in northern France*, in : *Speculum*, 50/1 (1975), pp. 33-47 ; STONES (A.), *The Minnesota Vincent of Beauvais Manuscript and Cistercian Thirteenth-century Book Decoration* (The James Ford Bell Lectures, no. 14), Minneapolis, 1977 ; BRÄM (Andreas), *Das Andachtsbuch der Marie de Gavre. Paris, Bibliothèque nationale, ms. nouv. acq. fr. 16251. Buchmalerei in der Diözese Cambrai im letzten Viertel des 13. Jahrhunderts*, Wiesbaden, 1997. 図版に掲げたゲッティ美術館所蔵の『交誦聖歌集』(Los Angeles, The J. Paul Getty Museum, ms. Ludwig I 9) については、KREN (T.), *French Illuminated Manuscripts in the J. Paul Getty Museum*. Los Angeles, 2007, pp. 23-24を参照。

50 Fol. 229, 241, 258, 262v, 271v, 277, 283, 434, 436v, 439v.

51 例えば、BRANNER 1977, pl. XIII, figs. 125, 126を参照。

52 例えば、BRANNER 1977, figs. 2, 109 を参照。

53 例えば、BRANNER 1977, pl. XII, fig. 11 を参照。

54 FOLDA 2005, p. 416.

55 現存する『歴史物語聖書』写本の制作地ならびに制作年代については、KOMADA (A.), *Les illustrations de la Bible historique : les manuscrits réalisés dans le Nord*. 4 vols. Thèse du 3e cycle, Paris, Université Paris-IV, 2000, tome 2, annexes 9, 10 を参照。

56 本論は、日本学術振興会による科学研究費補助金(基盤研究C)の対象である研究課題の一部をなすものである。ここに明記して謝意を表したい。

図1 シャンティイ、コンデ美術館 433(590) 番写
本 『修辞学』 フォリオ45v

図2 シャンティイ、コンデ美術館 433(590) 番写
本 『修辞学』 フォリオ113

図3 パリ、フランス国立図書館 新収フランス
語1404番写本 『フランス語聖書』 フォリオ123v

図4 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館
M494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ1

図5 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ89v

図7 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ302

図6 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 M.494番写本 『十三世紀フ
ランス語聖書』 フォリオ187v

図8 ニューヨーク、ピアポイント・モーガン図書館 M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ318

図9 ニューヨーク、ピアポイント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ439v

図10 ニューヨーク、ピアポイント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ470

図11 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ625v

図12 ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館
M.494番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ630

図13 アラス、市立図書館 561番写本 『ラテン語
聖書』 フォリオ95

図14 ロサンゼルス、ポール・Getty美術館
Ludwig VI 5 番写本 『交誦聖歌集』(断片)
第6葉裏